

この世界は……

この世界では、「セックスが推奨されている」。

なんでも、性的なことに潔癖になりすぎた結果、ひどく人口が減って——国力が落ちたらしい。それも、世界的に。

そんなことがあったものだから、その反動で、逆に性的なことがオープンに、そして日常的なものになった。

セックスとは、隠れて行う夜の秘密ではなく——日の下であけっぴろげに話題に出すものへ。

——男は性欲的に、女は淫らに。

そんなセックスが推奨されている——またの名を「貞操観念が終わっている世界」に生まれた前世持ちの男——たつみ異リヨウ。

そんな男が、やむにやまれぬ事情で、同級生に始まり、教師や大企業の社長まで、さまざまなひととセックスしていることをする、これは、その多忙な日々の物語である。

泊まりの場合は別料金

「^{たつみ}異くん、今日ってどう……?」

上目遣いで見上げてくる女子生徒。唇はプルプルで、まつげはくると丸まっていて、不安そうに丸める手もキレイに手入れをされている。

いわゆる一軍の女の子。誘うよりも誘われる方が似合う子だ。けれど抱いた抱かれたの噂うわさの中での彼女の相手はいつも年上だ。先輩だったり先生だったり。あとは外にもそういう相手がいると聴く。てっきり同級生は眼中にないのだと思っていたのだが。

どうせだから、肯定を返したいところなのだけれど。

「ごめん、今日は予定がある。……よければまた今度誘って」

残念ながら先着がいる。彼女は断られたことに少しだけショックを受け

たようだったが、名残り惜しいというのが分かるような表情を作って微笑むと頬を赤くして「うん、また」と頷うなずいた。

こういう時、顔がいいと楽だなと思う。プライドの高い子の誘いを断つても、ちよつと意識して微笑めば許される。

あの様子だとたぶんまた誘ってくれるだろう。次は『今日』とかではなく空いている時間を訊きいてくれるといいのだが。

とはいえ、固執するつもりもない。彼女が客にならずとも、俺には客が多おほくくいる。

それに、金を稼ぐという点から言えば、学校よりも外の方がいい。俺はいちおう学割（ただし同じ学校の場合のみ）というものを作っているのです。学校が終わる時間と外での予約の時間に空白があることが多いので、小遣い稼ぎができればなあという理由である。

バッグを肩にかけて教室を出る。

下駄箱で靴を履き替えていれば「リョウくん」と名前を呼ばれた。

ぴんと伸ばされた背すじ。無表情に近い涼やかな顔。彼の方が俺より少し背が低いけれど、不思議な圧があって小さいとは思わせない。俺の一下上の幼馴染だ。おさななじみ

やることなすことに筋が通ったひと。そうするのが正しいと思えば、それがどんなに周囲の行動と異なってもそれをする。傲慢な正義感というわけではなく、ただ彼は『ふつう』にそうしているというだけだ。対峙するたいじとずっと背筋が伸びるような人間。正しい人間というのはたぶん彼のような人のことだ。彼の前に立つと、俺はいつも息がしやすくなると同時に、少しばかり自分自身に失望する。

「梗介くん」

いつもの習慣でぱたとポケットを探る。あいにくブレザーのポケットにはなにもなかった。ポケットにないなら、バッグに、と手をつ込む。「帰りか？ メールを送ったけど、今日、ばあちゃんが夕飯を食べに来ないかって」

「ああ、さっき返信した。悪いけど、今日は用事がある」

「わるい、メールに気づかなかった。そうか……」

梗介の表情は変わらないが、どこことなく残念そうな雰囲気を漂わせた。

付き合いの長い幼馴染だ。他の人間には『分かりづらい』と言われているらしいその無表情も、俺には充分に表情豊かに見える。

「悪い」

「いや……。よければ、後で夕飯届けようか？ 部活の後になるけど」

「うーん、嬉しいけど遠慮しておく。今日は友だちの家に泊まるんだ」

「……そうか」

先程よりもさらに残念そうな様子に苦笑を返す。

彼も、彼の家族もいいひとたちだ。こうして俺のことを気にかけてくれる。たまにそれが煩わしく感じることもないことはなかったが、けれどやはりそれ以上にありがたかった。

会話の間、ずっとごそごそとバッグを探っていたが、やっと目的のものが見つかった。少し前に口寂しさに買った飴玉^{あめだま}。それを梗介に差し出した。

「はい、これ」

「ありがとう」

梗介に会った時になにかしら持っている菓子をあげるのは子供の頃から習慣のようなもので、なにもないと逆に落ち着かない気持ちになる。梗介も梗介で受け取るのが習慣になっているのか、特になにも言わずに受け

取ってちいさくはにかんだ。好きな味だったのだろうか。

「よければ、おばあさんにまた誘ってって言っておいてほしい」

「わかった」

こくりと頷いた彼にじゃあね、と手を振る。梗介も小さく振り返してくれた。幼馴染は一見堅物のように見えて、けれど天然なところがある。そしてけっこうおちやめなのだ。そういうところがかわいらしいと思う。

ちいさく笑みを浮かべて歩く。校門を出て、駅までの道とは別の道に爪先を向ける。こうすれば他の生徒に見られる確率も少なくなる。見られなくなにか悪いことが起こるわけではないが、あまり目立ちたくはなかった。

少し歩けば見覚えのある車を見つけた。高価の代名詞のような車種で無駄に縦に長い。普通ならばめったに見ないだろう車だが、俺はおもにこの車の主人のおかげで、よく見るところかよく乗ってすらいる。近づけばド

アが開いた。

「おそい」

彼は顔をしかめて睨^{にら}んできた。だが、言うほど不機嫌そうでもない。

「それでも、授業が終わってすぐに来たんだけどな」

慣れた動作で車に乗り込む。バッグは運転手が回収してくれた。

広い車内でむくれたようにして見せているのは、俺より一つ上の男――
財前。

だが俺とは違う国内有数の金持ち高校に通っている。制服だって俺のものよりずっと仕立てがいいものに見える。本来ならば庶民である俺とは関わりのないはずの人間であったが、ひょんなことから知り合って、それ以来、友好が続いている。

機嫌を取れとでもいうように近づいてきた唇に、なるほど、これが目的

か、と思いつつ避けた。替わりに頬にキスをする。なんで、という表情にスマホを揺らす。

「先にこっちだ」

「……わかった」

マッチの画面を開いて送金を確認する。

俺の泊まりの料金はかなり高い。基本の料金を高めに設定しているので当然といえば当然で、それを指定してくる客はあまりいないのだが。

しかし、この坊っちゃんはその希少なひとりだった。まあ高額といっても、彼にとってはたいした額ではないのだろうが。

「どーも」

「っ♡」

スマホをしまいつつ、つんと上がった顎にキスを贈る。それだけで頬を

染めるのだから、初心なのかなんなのか。しかし実際は初心とは対極に位置する男であることを、俺は知っている。

彼の顎を掴んで、こちらに向かせる。正面からみつめてやると、期待して上目遣いになった。それに小さく微笑んで、唇を合わせる。

「んっ♡」

薄く開いている唇を無視して、角度を変えて、何度もキスしてやる。

財前は嬉しそうな、けれどもどこかしそうな顔で眉根を寄せた。

触れるだけのキスを繰り返していると、こちらを窺うようにして、ちろり、と舐められた。それでもまだ無視をすると、抗議するように口が開く。

その瞬間、舌を滑り込ませた。

「ん、ちゅっ♡ んっ♡ んっ♡」

舌を絡ませてねっとりと口づけをしてやる。驚きに目を見開いた財前は、

怒りを忘れたのか、あっという間にトロンとなって目元を緩めた。

ざりざりと上顎のあたりをくすぐってやると、たまらないというように目を細める。力が抜けたようで、くったりとこちらに身体を預けてきた。

「んっ♡ ……、あ……ふっ……♡」

まだちょっとキスをしただけだ。それなのに、こんなすぐにふにやふにやになって大丈夫かと思うが、この世界ではまあ悪い性質ではない。男には相手を感じさせる力が求められることが多いものの、感じやすさというものもまた喜ばれる性質だからだ。

だが、おおきな家の長男の場合は、前者の方がいいというのは確かだった。

しかし、攻めるのが好きな女と番わせれば別に悪い性質ではない。

……いちおう説明しておく、この世界では女が攻めることはマイノリ

ティではない。セックスが推奨される世界だけあって、床上手な女は床上手な男と同じくらい引く手あまただ。辛い甘い好みがあるように、攻められる方が好きな者も攻める方が好きな者もいる。最終的に相手を喜ばせられるならば、どちらでもいい。

財前についてもいつかは床上手な女と結婚するのだろう。でもってその頃には俺はお役御免になる。……この男の父親の例があるので、確証は持てないが。

セックスが推奨される世界でも結婚後は基本的にパートナーとだけのセックスが推奨される。まあ“推奨”だけなので、ある程度の遊びはあるわけだ。……まあこの詳細はまた別に機会があれば。

キスだけで満足できなかったのか、財前はシートベルトを外して俺の膝に乗り上げてきた。危険だと思うものの、まあ一流の運転手を雇っている

のだろうから、事故などそうそう起こらないかと思ひ直す。デカイ車だけあって、財前が膝に乗っても狭さを感じないことが幸いだった。

彼は唇を尖^{とが}らせてこちらにキスをねだりながら、性急に服を脱いでいく。生地からして質が違うのが分かるブレザーを脱ぐ。きちんとアイロンをかけられた白いシャツの胸元に、ぽつぽつとふたつ押し上げるものがある。

そこをぴんっ♡、と弾いてやると「あんっ♡」と嬉しそうに鳴いた。上気した頬。潤んだ目が期待に輝いている。

この男は他と比べてとくべつ淫乱だ。まだ学校の連中や、外の庶民たちは恥じらいという概念があるが、彼は快楽を身体全体で感じて、そのことにあまり恥ずかしさを感じないようだった。いや、恥はあるが、それをスパイスにめいっぱい楽しんでる、というべきか。

それが金持ちだからなのか、それともこの男の特性なのかは知らない。

だがまあ、金持ちはかなりの確率で性に奔放な気がする。コイツの父親も大概……いや、今はいいか。

財前の無言の期待通り、シャツの上から胸を触ってやる。

「あっ、ん♡、……だめ、っ♡、あ、あ♡ ……♡」

ダメと言いつつ胸を突き出すようにしてくるのは笑うところだろうか。つんと立った乳首をカリカリと引っ搔^かいてやると、財前は甲高い声で啼^ないた。

ダメと言われたので片手は胸から引いてやる。あ……と惜しそうな顔をする財前だったが、その手が尻の穴に触れた途端、わかりやすく頬を赤くした。

「あっ♡、……だ……めっ♡ ……ああっ♡、そこは……あっ♡♡」

「うそつき。尻、突き出して。わざとだよな？」

ダメと言いつつ胸を突き出したり、尻を突き出したり。まったく言動と行動が一致しない坊っちゃんである。

この坊っちゃんは一発で開発されているので、尻を揉むだけで気持ち良くなる。

——ぐいー♡

尻穴には触らず、両手で尻を鷲掴みにして、開いてやる。財前は「ああ……っ♡」と気持ちよさそうに喉を反らした。

——ぐるぐる♡

次に、円を描くように揉んでみる。彼はスポーツもしていて、若いのも相まって、いい形をしていた。

「は……ああんっ♡♡！」

スラックスの生地が相応に厚いので思ったとおりに指は沈まない。しか

しそれでも財前にとってはじゅうぶんらしい。

少しだけ動きを早める。ぐー♡、と尻穴を伸ばすように尻を割ってすぐぐるぐる♡、と円を描くようにしてやれば、はひはひ♡ と薄い呼吸をしてよだれを垂らした。素の造形は秀逸なのに、今のそれは情けなく崩れている。

学校では『貴公子』なんて笑えるあだ名で呼ばれているらしいが、今の財前を学校の奴らが見たらどう思うのだろうか。少なくとも『貴公子』とは、もう呼ばれなくなるだろう。

それとも金持ち学校は、コイツみたいに自家用車の中で盛るのが当たり前だったりするのだろうか。

ちなみに運転席と座席はパーティションで区切られていて、小窓を開けないとあちらは見えない。窓だってスモークがかかっているから、覗き込のぞき込

むことはできない。

とはいえ、運転手はどういうつもりでこの車を運転しているのか、少し気になるが。

パーティションはまったくの防音とは思えないし、自分が運転している車内で坊っちゃんが痴態をさらしているのは分かっているだろう。仮に防音だったとしても、降りる時にどう見たって事後の坊っちゃんの顔を見るわけ。

……金持ちの運転手って大変だなあ。

「ひ……、っ♡ あっ♡♡ アッ♡♡！ それっ♡ アッ、つよいい♡」

財前をいじくり回しながら気づかれないようにちらりと腕時計を見る。出発した時間から計算すると到着までもうそこまで時間がなさそうだ。

今から突っ込むという選択肢はない。

仮に突っ込んだとしても、俺は遅漏気味なので到着までに終わらないだろう。そして俺は勃起したまま人様の屋敷を歩き回る趣味はない。

となれば挿入はなしに、この膝の上の男をイかせなければならぬが、ことこの男に限っていえばそれはそう難しいことではない。

胸と尻穴を可愛がっていた手をゆっくりと放してキスをする。小刻みに震えながらも一時的な休憩だと思ったのか、財前は素直に受け入れた。

ねっとり舌を絡ませながら、手は彼の腹と、その背面——背中へ。

手を腹にあてて円を描くように撫でる。気付いた財前が、怯えたようにびくりと震えた。涙目でこちらを見てくる。うつそりと笑うと期待と恐怖が混じった顔で、目を潤ませた。

ちゅう、と下唇を吸うのを最後に口を離す。

「た、異……♡」

「なんだ？」

腹に置いてある手を止めるように財前が掴んでくる。しかしそれに力は込められておらず、まったく抑止力にはなっていない。

「そ、そこっ。さ、さわらないでくれっ」

「……なんで？」

「あっあっ♡ 押すなあっ♡」

とん、と指先だけで軽く押す。それだけで財前は甘く震えた。

「でも、気持ちよさそうだぞ？」

「あっあっあっ♡」

とん、とん、とん、とリズムをつけて叩いてやる。財前はまるで下から穿^{うが}たれているかのように腰を震わせた。

逃げようとする財前を背中に回した手で阻む。

「だめっ♡♡、ダメえ♡」

ダメダメと涙目で首を振るくせに、俺の腕を掴む手には力が入っていない。声も甘く溶けていた。

くっ♡、くっ♡ と指の三本を少し深く沈めてやると、息を呑んでふるふると震えた。

「おっ♡ ア、あ……ッ、……あっ♡♡」

制服のズボンの股の間が薄っすらと色を濃くしている。中には立派なもの収められているのだが、俺の前でそれを使う機会はない。

ぐるぐる♡ と円を描くように押し込んだり、ぐーっ♡、ぐーっ♡ とゆっくりと長く押し込んだり。

そうしている内に、財前はたまらないというように俺にもたれかかった。肩口に彼の頭がくる。

ああ、すこし、失敗した。これをするなら対面座位ではなくて、背面座位でやるべきだった。これでは少し手が動かしづらい。

とはいえ、いまさらひっくり返すのも重労働なので、このままいく。この坊っちゃんが相手ならば、多少雑でも才能で補ってじゅうぶんに気持ちよくなってくれるだろう。

蕩^{とろ}けて夢見心地になっている彼の耳元^{みみもと}で囁く。

「財前、きもちいな？」

「う♡、ああ♡♡、……きも……あ……ちいい♡」

「どんな感じだ？」

「わ……かんなっ♡、……なんか、ア♡ ……はらっ、が、へん♡ ああ
っ♡♡」

「そうか。変なのか」

「ん♡！ ん♡！ その、……ぐー♡♡ って……されるの♡、あ、す
つきっ……っ♡ あ、っア♡！ っそ……れっ♡ ああっ♡！、それえっ
♡！」

声はぐずぐずに溶けていて、ぶるぶるとした震えが太もも越しに俺にそ
の快樂を伝えてくる。

（サンプルはここまで！）

このあとは、

- ・ 財前がいくまでお腹を押したり♡
- ・ 風呂場で財前をいじめたり♡

財前視点になって、

・ 主人公のフェラをしたり♡

・ 乳首責めされたり♡

・ ガン突きされたり♡

します♡

ぜひDLください♡

続きは本編で！